

# 中村修二氏(徳島大学工学部卒業、博士(工学)(徳島大学)がノーベル物理学賞を受賞

2014(平成26)年10月

2014(平成26)年10月7日中村修二教授(カリフォルニア大学サンタバーバラ校)がノーベル物理学賞を受賞された。同年11月3日に文化勲章を受章され、11月4日には文化功労者として顕彰された。中村教授は徳島大学工学部の卒業生(学部:1977(昭和52)年卒業、修士:1979(昭和54)年修了)で、青色発光ダイオードの研究は本学工学研究科の博士論文となっており本学の博士号を取得されている。

この業績は、照明の分野はもとより、ディスプレイへの応用、次世代の高精細DVDの開発、医用装置開発などにも多大な貢献をし、光電子工学を始め、広範囲にわたり画期的な技術革新をもたらすものである。

## 中村修二教授の学生時代の電子工学科の紹介

富永喜久雄

当時の電子工学科は、(1971(昭和46)年~1978(昭和53)年)までの間の卒業生数は29~44名で、少数精鋭でクラスの仲間意識が高く、教官も少数でした。所属の多田研(故多田修先生、故新谷義廣先生、福井萬壽夫先生、私富永)では厳しく鍛えられた半面、付き合いは緊密でした。牛田先生は電気工学科でしたが物性に造詣が深く、多田先生と大の仲良しで、よく講座へ見えられていま

た。当時の学生は体力面でもランニングに限らず、みな何がしかの運動をしていました。知的好奇心旺盛で、輪講も学生のグループが主導して行い、何の役に立つかなどは二次でした。当時の電気系先生方も新学科を盛り立てようと妥協しない教育での熱意がみなぎっていました。

徳島大学内で半導体という名のつくテーマは多田研のみで、学内での半導体研究の出発点に位置しています。中村氏のテーマは「BaTiO<sub>3</sub>半導体の電気伝導機構」というもので、当時主流のSi半導体ではなく、チタン酸バリウム(BaTiO<sub>3</sub>)の半導体化でした。日本電気製の1000万を超えるフローティングゾーン結晶育成炉で半導体結晶育成を行い、評価を行うものでした。中村氏の言では、4年生のときからの卒業研究が面白くなって修士課程まで行くと述べられています。かようなテーマでも面白く感じたところに氏の感性が人とは異なるものがあつたと思われま



(2015(平成27)年2月6日、前列、牛田先生、中村教授、多田先生、福井先生、後列、富永先生、近藤技官、岡本先生、西野先生)



Copyright ©Nobel Media AB, Photo: Alexander Mahmoud  
Copyright ©Nobel Media AB, Photo: Alexander Mahmoud

